

小山登先生を偲んで

篠崎 仁

小山登先生が令和 3 年 2 月にご逝去されました。疫禍ゆえ、旧知の面々が集い先生を偲ぶこともままならない現状が残念ではありますが、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

皆さまご承知のように先生は税理士として活躍される傍ら、雑誌『会計』に寄稿されるなど会計理論や企業会計の実務についても熱心に研究されていきました。税理士という実務家の立場から租税法と会計理論の関係性を研究し、数多くの業績を残されました。私が在籍していた時期の LEC 会計大学院は税理士を目指す社会人学生の割合が多く、学生の関心はともすると法律的な事柄に偏りがちでした。先生はそんな私たち学生に、適正な所得金額計算の基礎となる会計知識の重要性を日ごろから説かれていました。

企業会計の専門家である税理士にとって会計の知識が重要である理由を、先生は次のように述べられています。

法的アプローチは、法律的に適用要件など様々法的な手続きを考える時には非常に大事ではあるけれども、やはり国家の財源である適正な所得金額を求めるためには、会計理論いわゆる企業会計の知識がやはりすごく大事だと考えています。

企業は日常、経理処理・会計処理を行

ないますね。法的アプローチから考えますと、当然民事法、民法、会社法、商法などが前提とされていて、例えば通常の商品売買にしても必ず取引という契約にもとづいて会計処理を行っているわけです。その段階で法人税額が課税要件に適合しているかという大前提がほぼ決まってしまうのです。

したがって、会計的知識を十分に身につけていけば、適正な法人税、所得税の判定ができるはずですが、更にそこにきちんとした根拠があれば、税務当局に説明できますし、基本的に企業もトラブルを回避できると思うのです。

(LEC 会計大学院紀要第 11 号 座談会より)

先生は税法に関する知識が重要であることを前提としながらも、税理士にとって適正な所得金額計算の基礎である会計の知識が、税法の知識に劣らず重要であると述べられています。そして、日々の企業活動が十分な会計的知識に基づき処理されることが、適正な税額計算や租税トラブルの回避に繋がると説明されています。

会計の知識を重視するこのような姿勢は、先生が受け持たれていた税法会計の講義や論文指導の現場において常に溢れていました。ともすれば論文執筆のプレッシャーから視野

狭窄に陥りがちな私たち学生に対し、会計大学院だからこそ学びうる深みのある会計知識を学び取ってほしいと願われていたのだと思います。

先生はまた、大学院での教育についても熱心に取り組まれていました。LEC 会計大学院の学生の多くは社会人の実務家であり、様々な考え方や生活背景をもつ学生が集まります。多様な背景をもつ学生たちの言葉に、先生はいつも丁寧に耳を傾けておられました。かくいう私も管理会計の論文を書く息巻いて入学した変わり者でしたが、先生のクラスに受け入れていただいたことにより初志を遂げることができた学生の一人です。様々な事情を持つ学生一人一人に対して先生は常に寛大であり、多様な学生たちの個性を尊重されました。先生の大きなリスペクトに支えられ

て大学院生活を全うすることができた学生は、私の他にも数多くいたはずで

す。私が最後に先生とお会いしたのは、大学院を修了する年の夏だったと思います。暑い中、先生は両手に配布資料をいっぱい詰めた紙袋を下げて、別棟の教室へ向かわれるところでした。前年に病氣療養され、以前に比べれば随分痩せていらっしやいましたが、その後ろ姿は授業に対する熱意に溢れていました。その後、年が明けて間もなく新型コロナウイルスが流行しました。修了式や懇親会も中止となり、ついに御礼する機会を失ってしまったことが心残りです。今はただ、先生のご冥福をお祈りするとともに、学生として小山先生という素晴らしい人生の先達に出会えたことを、深く感謝いたします。